

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 月 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	井上 漱太

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
ポルトガル アルガ山脈
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
野生馬ガラノ種における行動観察
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 28 年 6 月 2 日 ~ 平成 28 年 6 月 25 日 (24 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
神戸大学山本真也准教授
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回の渡航ではポルトガルのアルガ山脈に生息する野生馬ガラノ種における行動観察を目的とした。行動観察は目視かつ、ドローンを用いて空中からの写真、動画撮影を行った。群れをテーマとして観察することは決めていたが、細かいデータ収集手順などは現地を観察をしながら詰めていった。 今回渡航した春の時期は出産のシーズンかつ、牝馬の移籍シーズンでもあった。野生馬は1頭もしくは2頭の牡馬、複数頭の牝馬からなるハーレム集団と若牝馬のみからなる集団の2パターンを形成することが知られている。今回のフィールドは基本的には広い草原になっており、25 集団、個体数は 170 個体確認されている。

数日間観察を行い今回のデータ収集は特定の二つの群れに焦点を絞り行うことを決定した。この二つの群れは明らかに別の群れであるにもかかわらず、常に移動を共に行き、群れ同士が至近距離を保っていた。このような群れはこの2 集団のみにしか見られなかった。また、この群れの片方には他集団から移籍してきた牝馬が存在していて、この牝馬の行動、群れ内での空間的な位置にも注目した。さらに、観察途中でこの2 集団間での牝馬の移籍も起こり、同様に行動を記録した。 具体的な手順は割愛するが、ドローンを 30 分おきに飛ばし、2 群間の様子を記録し、その後同時に撮影した平面写真、ノートを用いて個体識別を行い、個体同士の位置関係や群れ間の様子を解析する。まだ解析途中であるので結果の詳細を説明することはできないが、少なくともハーレム集団における牡馬の位置関係については非常に興味深い結果が得られそうである。 この他にも興味深い観察を多数行うことができた。幾つか報告すると、上記の群だけでなく数群が距離は様々であるものの、連れ立って行動していること。母馬は仔馬を基本的に放置すること。仔馬が寝ているにもかかわらず、群が移動してしまい、仔馬が迷子になることが度々あった。仔馬は自分の群を把握する能力が低く、視力も高くないようである。霧が濃くなり視界が悪くなるもしくは、個体間の距離が大きくなると、積極的に声によるコミュニケーションを行うこと。この他にも興味深い行動を多数観察することができ、馬たちは自分の想像よりも複雑な社会構造を持っているように感じた。馬に関してあまり知識がなかったことが、逆に視野を狭めず色々なことを考えられた要因かもしれない。 渡航先についての報告を少し行う。滞在したのは Montaria 村という小さな村の廃小学校である。村民のほとんどは英語を話すことはできないので時折困った。ただ、村民たちはとてもフレンドリーで、言葉の全く通じない交流も新鮮で楽しかった。気温は日本より涼しく観察を行った山頂では雪が降ることさえあった。また霧が濃い日が数日間、断続的に雨が降る期間が数日間続き、天候が日ごとに変わるというより、同じ天候が続くケースが多かった。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

今回の渡航では初めてある程度まとまった期間、データを取るという経験を得ることができた。その中で見るべきポイントやデータ収集の大変さ、装備や安全対策など学ぶべきことの多い渡航であった。

6. その他 (特記事項など)